

# ぼくを燃やす炎 El fuego en el que ardo

タイトル：ぼくを燃やす炎 El fuego en el que ardo

著者：マイク・ライトウッド Mike Lightwood

出版社：プラタフォルマ Plataforma Editorial

出版年：2015年

ページ数：384ページ

言語：スペイン語

読者対象：15歳以上

ジャンル：YA

レポート作成：青砥直子

## 概要

ゲイとして生きることは難しい。周りの人々にありのままの自分を受け入れてもらえず、オスカルは地獄のような日々を送っている。だがつらさが限界に来たとき、オスカルはひとりの少年と出会った。自由な価値観を持つその少年、セルヒオに助けられて、オスカルは選択を迫られることになる。人々の憎しみの炎で焼き尽くされるのか、それとも自らの灰のなかからよみがえるのか。

## おもな登場人物

オスカル：この物語の主人公。16歳の男の子。ゲイということがばれていじめられている。

セルヒオ：柔道教室で知り合った少年。17歳。

フェル：オスカルの親友。ただひとりオスカルのことを理解している。

ダリオ：オスカルが恋心を抱いていた元親友。

マリア：オスカルの姉。

ラウラ：フェルの恋人。

カルロス：同級生。オスカルを目の敵にしている。

## あらすじ

### 第一部 アニマル・シティ

月曜の朝。学校に着く前から、オスカルの地獄は始まっている。後ろから叩かれ、「おかま」とののしられる。教室に入っても、椅子にガムがはりついていないことを確かめてからでなければ座れない。オスカルに面と向かって話しかけてくるクラスメイトはだれもいない。今やたったひとりの親友となったフェルを除いては。

この始まりは、もうひとりの親友だったダリオに「好きだ」と告白したことだ。彼の「気持ち悪い」という言葉、そのときの目つきに、オスカルは傷ついた。おまけにダリオは、告白されたと他人に言いふらした。ゲイだという噂が広まるとすぐ、みんなのいやがらせが始まった。

家に帰っても、父がいる限り平和は訪れない。男性優位主義者の父はオスカルに失望していて、なにかにつけて叱ったり、殴ったりする。ゲイだとわかったらどうなるか、オスカルには想像すらできない。優しい母にも、打ち明ける勇気はない。母から拒絶されるのが怖かった。

たまたま好きになるのが男の子だけ。自分にはなんの責任もないのに、どうしてこんな屈辱を味わわなければならないのか。耐えきれなくなったとき、オスカルはバスタブに身を沈めて、かみそりで腕や太ももを傷つける。流れる血と鋭い痛みが、いやなできごとを忘れさせてくれるからだ。

クラスメイトのカルロスにひどく殴られたことがきっかけで、オスカルは柔道教室に通うことにした。自分を守ろうと決めたのだ。教室はオスカルの住む小さな村から電車で45分の街にある。そこで出会ったのが、セルヒオというひとつ年上の青年だった。

### 第2部 ゴーストタウン

セルヒオはオスカルへの恋心を隠さず、積極的にアプローチしてきた。オスカルの思いも募る一方だったが、深い関係になる勇気はなかった。ダリオのことが尾を引いていたからだ。ダリオに対しては、一方的な片思いというわけではなかった。ふたりきりのとき、性的な「遊び」を仕掛けてきたのはダリオのほうだったのだ。だがオスカルが本気になると、ダリオは冷たく拒絶した。それ以来、オスカルはひどく臆病になっていた。

心に傷を抱えたオスカルを、セルヒオは理由も訊かずに優しく包み込んだ。オスカルの気持ちも徐々にほぐれてゆき、クリスマスの次の日、ふたりは初めてのキスをした。

### 第3部 ライオンハート

オスカルは姉マリアは、父を嫌って街でひとり暮らしをしていた。家族団らんで過ごすはずの大晦日にもマリアが帰ってこなかったことで、激怒した父は母を殴った。両親のいさかいを目の当たりにしたオスカルは、自分の部屋に戻って知らないうちに自傷行為に及んでいた。

携帯電話のメッセージでオスカルをつらい思いに気づいたセルヒオは、無免許だというのに、夜中に車を飛ばして家までやって来た。村はずれの農場でふたりは、抱き合いながら元日の朝を迎えた。

自分がゲイであること、それがばれて学校でいじめられていることを、オスカルは母に打ち明けた。母は拒絶するどころか、「なにがあらうとあなたを愛している」と言い切った。もう体を傷つける必要はないと思ったオスカルは、かみそりをゴミ箱に捨てた。

父が留守にする日を狙い、オスカルはセルヒオを家に呼んで母に紹介した。だが自室でキスをしているところを、いつの間にか帰ってきていた父に目撃されてしまった。父はオスカルを殴り、「こんなおかま、おれの息子ではない」とののしった。

限界を感じたオスカルは、家を出て行くことに決めた。村からも離れたかったが、母を残していくことはできない。そこで唯一の親友フェルの家に居候しながら、「お金がないから家を出る勇気はない」と言う母の説得を続けることにした。

だが、学校でも最悪の事件が起きた。オスカルを目の敵にするカルロスたちがシャワー室で、オスカルに向かって一斉に放尿したのだ。自尊心のかけらまで奪われたオスカルは、フェルの家の浴室で体にかみそりを当てた。今度こそ手首を切って死んでしまうつもりだった。危険を察知したフェルが浴室に飛び込んできたとき、かみそりは手首まで数センチのところにあった。

オスカルは村の高校を離れることにした。母もとうとう家を出る決意を固めた。街でアルバイトも見つけ、姉のマリアを加えた3人で、アパートを借りて暮らすことになった。

新しい高校はセルヒオが通う大学の近くにある。ふたりで登校しながら、オスカルは自分が強くなったと感じていた。もう炎に巻き込まれて焼かれることはない。自分自身が炎となり光となって、周りを照らしながら生きていく。オスカルは、そう心に決めた。

オスカルとセルヒオはあっという間に仲良くなった。セルヒオも男の子が好きな少年だった。彼と出会ってから、オスカルは自分を傷つけないという欲求を覚えなくなっていた。

#### 所感・評価

翻訳家、ブロガーとして活躍する作者が、ネットを通して知り合った若者たちの体験を下敷きに書き上げた初めての小説。学校でのいじめ、横暴で旧弊な考え方の父親、多様な価値観を認めない小さな村での生活……、そのすべてに追い詰められた少年の苦悩を鮮明に描き出している。

主人公オスカルは多感で繊細な少年だ。失恋といじめがきっかけで自傷行為を始め、「ゆっくり死んでいく」生活を送っている。街で知り合ったセルヒオとの恋によって前向きになり、強くなろうとするが、心が傷つくたびにかみそりを手に取ってしまう。そのあまりに不器用な生き方に、読んでこちらが息苦しくなってしまうほどだ。

文章は基本的に一人称現在形だが、随所に「(以前)」と題したページが挿入され、そこでは幼いころに父親から受けた暴力、親友だったダリオにもてあそばされた経緯などが過去形で語られる。オスカルが傷つきやすく臆病な少年にならざるをえなかった理由が徐々に明かされていくにつれ、最初はただ弱々しいだけだった主人公の印象も変わり、いつの間にか応援したくなる。読者の深い感情移入を促す、巧みな構成と言えるだろう。

学校での陰湿ないじめとは対照的に、セルヒオとの恋はあくまで甘くロマンチックに描かれている。なにがあってもオスカルを理解し、やさしく包み込んでくれるセルヒオの人物造形は少し非現実的だが、ティーンエイジャー向けの「胸キュン」物語の王子さまとしては理想的だ。主人公のカップルが男同士ということを除けば、王道のラブストーリーである。いや、むしろ障害が多い分、より切なく純粋な恋物語と言えるかもしれない。LGBT(性的少数者)や性同一性障害といった悩みを抱えた若者、BL(ボーイズラブ)好きの女子はもちろん、多くのティーンエイジャーの心をつかむのは間違いないだろう。

類書としては米国の男子高校生同士の恋を描く『ボーイ・ミーツ・ボーイ』(デイヴィッド・レヴィサン著、中村みちえ訳、ヴィレッジブックス)が挙げられるが、明るく、からっとした雰囲気を持つ同書と比べると、本書はウェットで内省的な描写が多い。つまり、より日本人が感情移入しやすいと言える。また少年同士の性を真正面から

取り上げた本が日本ではほとんど見当たらないことを考えると、本書を出版する意義は大きいのではないかと思われる。

但し本書にはBL小説のような濃密な性愛描写や自傷のシーンがふんだんに盛り込まれており、また無免許運転や未成年の飲酒の場面も出てくるため、大人が子どもに勧めるのには向かない。だれにも言えない生きづらさを抱えた少年少女がふと手に取って読みたくなる、そんな紹介の仕方ができればベストだろう。

試訳(第5章より抜粋。49ページ本文冒頭～51ページ下から8行目)

泣き叫ぶ。今、ぼくがしたいのはこれだけ。ぼくはひとりの人間なんだ。ただの、ひとりの人間だ。いったいどうしてこんなこと、我慢しなけりゃいけないのか。こんなことをされる理由なんてない。ぼくはただ、(死にたい)

泣いて、叫びたい。あらゆる物をこわして、打ち砕いて、粉々にして、叩きつぶしたい。そうしているうちに体じゅうの骨が折れたっていい。めちゃくちゃにしたい。物と同じように、あいつらをめちゃくちゃにしたい。これまでぼくにさせたことの仕返しだ。あいつらには、それで充分だ。

だけどぼくにはできない。そんなチャンスなど訪れないとわかってる。だからぼくはかみそりを太ももに強く押しつけ、血がぼたぼたとバスタブの底に落ちていくのを眺めている。

映画かドラマで、いい人には悪いことが起こるものだという話を見たことがある。たぶん宇宙はそれでバランスがとれている。まるでいい人がいい人であることを証明できるように、神さまかほかの誰かが試練を与えているみたいだ。世界の法則でそうなっているのかもしれない。まるで人生は、ただのテストにすぎないって言われてるみたいだ。

ふん、宇宙なんてくそくらえだ。ぼくはなにも悪いことなんてしていない。

ただ。

幸せに。

なりたい。

だけ。

これって、そんなに大きな願いだろうか。

でも、もうだめだ。このまま持ちこたえられるとは思わない。決めた。もう二度と、こんな目にあいたくない。こんな目にあうわけにはいかない。まだなにをすればいいのかわからない。だけどなにかしなくちゃいけない。いつまでも悔しい思いばかりしていたくない。叩かれたのは初めてじゃないけど、もうたくさんだ。今日みたいなこと、二度とあってはならない。

絶対に。

血を洗い流してバスルームから出ながら、フェルにメッセージを送ることにする。

オスカル：会える？

二分と経たないうちに返事が来る。

フェル：ラウラという。

フェル：だいじな話？

すごくフェルに会いたいし、今日のこのあとではなおさらだけど、学校の外でフェルがカノジョと会える機会はそんなにないのを知っている。だから、じゃましたくない。

オスカル：心配しないで。

オスカル：明日話すよ。

フェル：心配するよ。

フェル：いつものカフェで、5時でいい？

オスカル：ほんとに、なんでもないから。

オスカル：明日話すってば。

フェル：オッケー、それじゃ5時にね。

ぼくは思わずほほえんでしまう。これがフェルだ。いつも寄り添っていてくれる。そうしてほしいときにも、そうでもないときにも。

\*\*\*

ほんとのこと言うと、ラウラにはあんまりいてほしくない。すごくいい子でぼくとも気が合うけど、ラウラがいっしょだと、フェルになにもかも打ち明けるとはできない。少なくとも、ふたりだけで話すときほどには。ラウラはぼくが学校でどんな状態かわかっているし、フェルとおんなじくらい支えになってくれる。だけど今日起きたことは悔しすぎて、ラウラの前で言う気にはなれない。するとラウラは座ってほんの数分で、ぼくが言い出せずにいることがあると気づく。賢くて、フェルよりずっと勘がいいんだ。思わせぶりにぼくを見てから、ラウラはこう言う。

「ごめんね、ふたりとも」立ち上がり、携帯をちらっと見る。「ここに来る途中で、かわいいハンドバッグを見つけたの。気になって仕方ないんだ。だから、悪いけど……」

「ラウラ！」フェルが反対する。「まだ来たばかりだよ！

ほんとに、そんなどうでもいいもの見るために行っちゃう気？」

「おこんないですよ。ちょっとの間あたしがいなくなたって、オスカルは気にしないわ。でしょ？」ラウラはほほえみながらぼくを見る。ぼくはうなずく。フェルは不思議そうにぼくたちを見ていたけど、すぐにわかったみたいだ。ラウラが続ける。「だと思ってた。すぐ戻るね」

「遅くなっちゃだめだよ、わかった？」フェルは熱っぽい視線を投げかける。ラウラは体をかがめ、フェルのくちびるに素早くキスをする。ぼくは思わずほほえむ。なんてかわいいカップルだろう。

Source URL: <http://newspanishbooks.jp/read-report-jp/bokuworan-yasuyan-el-fuego-en-el-que-ardo>